

今年度の研究を通して

保育の評価のしくみに沿って、毎日、保育について語り考えてきた。迷ったり、どのような方向性が幼児の育ちにつながるのかを考えたりする上で指標となったのは、昨年度からの研究で見出してきた8つの評価観である。これらは職員の合意で導き出されたものであるからこそ、迷ったときでも個人の主観にとらわれず、大事なものを見失わずに保育を行えたのだと思う。今年度は、これまで以上に保育についてよく語り合ったと感じる。保育のしくみとして設定した時間以外にも、時間を見つけてクラスに関係なく話し合ったり、写真を整理しながら幼児同士のかかわりを思い出してシェアしたりすることが自然と行われていた。評価観の1つである「みんなが笑顔で前向きになれる」ことを実感する1年間だった。他園との交流においても、援助や振り返りのあり方などを様々な視点で語り合い、自分たちの保育を見直す貴重な機会を得た。保育をよりよいものにするため、これからも語り合い、考え続けることを大切にしていきたい。

< 3歳クラス担任 >

この一年間、幼児にどう言葉をかけるか、どう援助するか、どう環境構成していくのかについて、迷い考え続けてきた。しかし、迷ったことはあっても「悩んだ」ことはほとんどなかった。

のびのび保育シートを配付した日には、必ず誰かが反応を返してくれた。書いたことに基づいて、他のクラスの職員も同じ心もちで援助をしている。職員室で迷いを話すと、そこから自然にミニカンファレンスが始まり、明日の援助の方向性が見い出せる。評価観の言葉を共通言語としてみんなで語る…。全職員で全員の子どもを支える本園の保育には、この3年間で整えてきた評価のしくみが欠かせないものだったのではないかと振り返る。

1年間、自分の保育に対する見方を日々更新してきた。その過程には、カンファレンスで得たもの、様々なエピソード、幼児の姿、失敗、葛藤、喜び、様々なものが含まれている。この過程を大切に、今後も保育の質の向上を目指し続ける教師でありたい。

< 4歳クラス担任 >

3年間、保育の評価の研究に携わり、本当によく「考えた」と振り返る。形式的ではなく、ある程度の自由度があるということは、簡単そうで逆に難しい。伝えたい対象が常に存在することで、悩みを含む自己の保育の姿をさらけ出し、共に考えていくことにもつながる。記録を読み返すと、1年目は「安心感と一体感で保育を語ることの大切さ」を、そして2年目は「『話したい』で高まるモチベーションと心持ち」について語っていた。皆でつくりあげる保育の素晴らしさを実感した3年間だったと自信をもって言える。こんなにも職員に感謝できる研究が他にあったらだろうか。同士に感謝である。

< 5歳クラス担任 >

日々の振り返りの中で、その日の保育の悩みを話すことで解決・解消することができた。またカンファレンスでは他のクラスの先生からも様々なアドバイスを頂き、援助の選択肢が増え、次につながる保育をすることができた。

< 3歳クラス副担任 >

>

勤務年数に関係なく、日々の振り返りやカンファレンスで保育の話をすることによって、職員間で情報共有をすることができた。その結果、幼児理解が深まり、同じ方向を向いて保育を行うことができた。職員の連携がとれることで、幼児の育ちをより深く支えることにつながったと思う。

< 4歳クラス副担任 >

1年間のカンファレンスを通して、日々声を出し合うことの大切さを学んだ。保育の中で感じたことや疑問に思ったことを常に伝え合い、園全体で共通の思いを持って保育を行うことが、一人一人の幼児の育ちを支える援助につながることができた。

< 5歳クラス副担任 >

クラス関係なく遊戯室や園庭で子どもたちとかかわる際、子どもたち一人一人のやりたい思いを支えるために、見守り、言葉をかけ、時には一緒に遊び、友達同士の関係を仲介してきた。養護教諭であり保育経験のない自分が、ここまで自信を持って子どもたちとかかわることができたのは、カンファレンスを通して、保育の目指す方向性や考え方を確認し合えたこと、「のびのび保育シート」を通して日々の遊びの様子や担任の思い、関わりがみえたからだ実感している。

また、8つの評価観を職員で考え、確認し、練り上げてきたプロセスがあったからこそ、附属幼稚園の保育のありようがはっきりし、自分が幼児と向き合う際の援助につながったと思う。

< 養護教諭 >